

藤の虻ときどき空くうを流れけり

藤田湘子

花虻は実に興味深い虫。悟り顔で静かに空中に留まりながら実は懸命に翅を動かしていたり、突然異次元へ弾き出されたかのようにあらゆる方向へ飛んで消えていたり、蜜を吸うときはまたすごい集中力で花粉まみれになりながら没頭している。あのひょうきんな自由さと律儀さの動きは見ていて飽きない。これら全ての動きを髣髴とさせる「ときどき空を流れけり」であると思う。

自註には「一日十句は何の抵抗もなくすんなりと二年目に入った。苦しさはなく楽しみのほうがずっと多い。それに少々欲も出てきた。ああだ、こうだでない俳句、サツと一筆描きにしたような写生句を望んだが、かたんに問屋は卸してくれない。」とあるが、成果の一句。

1984年 (S59.05.06作) 第七句集『去来の花』 鑑賞・野本京